

滋賀県立高等専門学校構想推進本部会議（第3回）議事概要

令和5年11月24日開催(10:00～11:10)

出席者：

三日月知事、井手公立大学法人滋賀県立大学理事長、栢木野洲市長  
学識経験者（八尾 健 氏、渡辺 圭子 氏、塩瀬 隆之 氏）

三日月知事（本部長）：

- ・当本部は、昨年度に立ち上げ、2回にわたり「基本構想 1.0」の策定に当たっての御議論をいただいた。
- ・今年度、担当部署の人員体制を強化し、かつ、公立大学法人と県との連携を密にしながら、基本構想に基づき、ハード、ソフト両面において、設置準備を加速化させている。
- ・ハード面では、建設予定地の造成設計を行うとともに、校舎等の各施設について、整備の大きな方向性・方針を決定し、P F I 方式による発注準備を進めてきた。
- ・ソフト面では、他高専の現役の先生など複数の関係の皆様から御助言・御指導を賜りながら、カリキュラムの具体化に向けた検討を進めている。私自身、徳島県の神山まるごと高専を視察するなど、各地の高専を回りながら勉強・研究を進めているところ。
- ・「価値創造力と専門性、実践力を兼ね備え、協働して挑む高等専門人材」育成には、低学年の時から、学年やコースを超えて学生・教員が交わりながら、地域課題や行政課題、企業の現場課題など、現実の課題解決に技術で挑戦していく機会をたくさんつくっていくことが重要。
- ・県立高専では、課題解決型学習といわれる P B L をカリキュラムの一つの軸に据え、カリキュラムの精緻化、設置認可申請に向けた準備を進めて参りたい。
- ・同時に、県立高専の機能や価値を高め、地域産業の活性化や新たな産業の創出していくためにも産業界との連携・共創も重要。今後のステップとして、県立高専と産業界との双方向のコミュニケーションの場となる「フォーラム」を近く、産業界と共に立ち上げ、県立高専の応援団を増やしていきたい。
- ・私から申し上げた、県立高専において大事にしたい「循環」「共創」「挑戦」、この3つのキーワードを大事にし、今年度末までに基本構想を 1.0 から 2.0 に、さらに次年度以降も着実に歩みを進めていきたい。
- ・令和 10 年開校、野洲にできる高専に対し、日増しに期待の高さを感じている。期待を糧にさらに頑張っていくので、今後もしもご指導ご鞭撻をお願いします。

（報道機関 退室）

<議題 (1) 滋賀県立高等専門学校基本構想 2.0 (素案) について>

事務局：

資料 1-1 に基づき、基本構想 1.0 からの変更点を中心に説明

(意見交換の概要)

- ・諸外国と比べ日本に欠けているものとして、自分で自分を評価する力が弱い。外国の評価を受け入れてしまうという弱さがある、高い技術を活かせずに相手の言いなりになってしまうことが結構あるので、高専でも自分の技術を評価する力を養うことが必要。
- ・今ある技術をどう組み合わせるのか。技術分野にも政治的な要素が含まれていることもあり、そういうことも知らないといけない。技術者が技術にのみ向き合っていていい時代ではないので、人間力・自己評価力は重要。
- ・企業から見ると高専は敷居が低く、来やすい、とっつきやすい部分がある。裾野を広くし、多種多様に企業と一緒にやれる要素がある。
- ・実習、実験では技術職員は必須。また、常勤だけではなく、非常勤の先生をどのようにお願いするかも現実問題として重要。非常勤を何人にするのか、どのように採用するのか現場に影響するので、今後、どの科目をどのように非常勤教員にするのか検討が必要。
- ・ビジネススキルについては、大学生でも難しく、さらに若い高専生には難しい部分もあると思う。特に、文書作成能力も重要で、科学技術をどう表現し伝えるか、資料の作り方という力も重要。
- ・「起業しようとする心」は育成してもらいたい。
- ・日本の学生・教員の学会でのアピール力は海外のそれに比較すると弱い。もっとコミュニケーション能力、話力、引き込む力を上手く引きだせるような科目があると良い。
- ・PBL については、企業から言われるがまま指示されたテーマだけで研究していると、力は養われないので、テーマ設定について適切なコーチングが重要になる。
- ・題材の設定は大事で、だからといって、指導者からの深すぎる指示は視野が狭くなってしまうので、題材の設定を上手く導くようにすれば面白い PBL ができるのではないかな。
- ・学年、学科が違えば基礎知識が異なるし、知識レベルの違いなど実際難しいところはあり、よく検討する必要がある。
- ・PBL がプロジェクトマネジメントということであれば、進め方に対するフィードバックも必要となる。まず、カリキュラムとして問題の解決を目指すのか、そのプロセスの学びを目指すのか、それとも両方を目指すのかを決めるべき。その中で、プロジェクトであれば、進め方に対して自分自身の学びの状態を評価することが大事。
- ・複数の学年にまたがると、後輩を指導する経験を通じて、自分を俯瞰する力がつくのではないかな。わざと違う分野の学生に教えるようにするといいのではないかな。
- ・情報基盤を共有することも重要。規格の不統一によって日本は国際競争で負けている事実

もあるので、この新高専では情報基盤として CAD をはじめとする情報技術などは、新しいもの、できるだけ国際標準のものを使えるようにすべき。

- 高専と民間との連携が低価格のままだと、安価な R & D として外注先のように見られることがある。単に企業側から持ち込まれた課題に対応するだけでなく、むしろ企業のものづくりをアップグレードするために、デジタルトランスフォーメーションの観点からも研修をするような連携をするとよい。
- 受け皿側となる企業も学校とともに成長する、一緒に育て合うような関係性であり、その中で高専生と一緒に育つ仕組みができるといい。
- 県立大学が持つ社会人向けの学び直し講座のノウハウを援用し、社会人と学生が共存するような場を大学の経験を借りて実現できたらいい。
- カリキュラムの中でぜひ新高専のユニークな試みとして導入を検討いただきたい候補として「科学コミュニケーション」と「サステナビリティ」の2つあり、この言葉を入れられないか。
- 科学コミュニケーションは他人や異分野異業種に対して説明する力がつく。高専設置を機に高専生が若い世代にコミュニケーションすることをプログラムとして盛り込めば、若い世代への理系人材育成にも貢献する。
- 世間ではサステナビリティをベースとした考えが広まってきており、滋賀ならではの点で、循環型経済を学ぶのはどうか。サステナビリティのために技術をどう活かすかを考える力を身につけられると良いと思うので、滋賀の高専に行けば最先端が学べるという評価に繋げるのも面白いのではないか。
- 地元商工会、工業会からは全面的な協力意向であり、大企業を含め、地元企業でのインターンシップや実習、講師派遣なども可能と考えている。
- これまでも丁寧に住民説明会を実施していただいております、今後も地元住民との接点を持っていただくことで、住民にも「高専の誕生に携わった」気持ちが生まれ、そうしたことが高専の応援につながるのではと考えている。
- 地域の祭りごとに学生が参加したり、保全される森林部分での環境ボランティア活動に学生も参加してもらうなどにより、地域から愛される高専になると思う。
- 人間力やコミュニケーション能力などをいかにカリキュラムとして具体化していくかという意見が出た。人間力・コミュニケーション能力の育成には語学力も必要になると思っている。
- PBL は重要であるが課題も多く、企業等と連携し、いかに効果的で意義のあるものができるか、今後知恵を絞りたい。
- 地元企業と一緒に育っていく、アップグレードしていくという考えが良い。
- 人間力はやはり大事であり、どういうカリキュラムで育てるかを考えないといけない。
- サステナビリティはこれから創る学校として、しっかり取り組みたい
- ものづくりの古い価値も大事で、いい部分は残せばいいが、そこだけにとらわれてしまう

と、新しい価値を見逃してしまうことになってしまう。学生は最先端に触れる機会が多いが、社会に出たときに、遅れている現場に引き戻されることが無いようにしないといけない。

- ・企業も一緒にアップデートしていくという視点を大事にしたい。
- ・人間力、評価力、コーチング、フィードバックなどは共通してキーワードとして出た。こういう力が非常に大事で、この部分のスタッフを非常勤も含めどうするのか、手法をどうするのか考えないといけない。
- ・PBL 初年度について特に工夫が必要になると思うのでアドバイスいただき、しっかり検討を進めたい。
- ・新設校なので、1年ごとに学年が増えていき、5年間かけて完成する。必要に応じて非常勤関係は柔軟に考えることも可能。

<議題 (2) 報告事項について>

栢木野洲市長：

資料2に基づき、MIZBEステーション整備の方向性について説明。

(意見交換の概要)

特になし

以上